

資料館だより

第 56 号

平成 27 年 (2015)
3 月 31 日 発行



げんじゅうあんき
『幻住庵記』版木 (渡辺善一郎氏所蔵)

この版木は、昭和62年(1987)、武蔵村山市内の旧商家である渡辺宅の土蔵改修の際に、その天井裏から発見されたものです。その後、平成8年(1996)の歴史民俗資料館の調査によって、松尾芭蕉の代表的な俳文『幻住庵記』の版木であることが明らかになり、一部の研究者の間ではその存在が知られていました。

しかしながら、これまで当館においても、この資料についての詳細な報告はなく、市内で発見された資料でありながら、あまり知られていませんでした。

そこで、今号の資料館だよりでは、この『幻住庵記』版木についての論考を掲載します。

1. 『幻住庵記』 版木の概要

松尾芭蕉の『幻住庵記』は門人・曲水¹の勧めによって元禄三年（1690）四月六日から七月二十三日まで滞在した幻住庵についての「記（書きつけの意）」である。

白石悌三論文「幻住庵記の諸本」に指摘される通り、当該作品は「草案—初稿—再稿—定稿」と何段階にも渡る改稿を経ている。作品としては芭蕉の「俳文意識に基づく最初の作文」と位置付けられ、俳書の序文や跋文を除けば、「芭蕉が生前みずからの意志で公表した唯一の俳文」であるという意義をもつ²。

本稿は、そうした『幻住庵記』のうち、平成八年（1996）に東京都武蔵村山市内で発見された『幻住庵記』版木の本文（以下、「版木本文」とする）について、他の『幻住庵記』諸本にはみられない「版木本文」成立の経緯が記された一連の文章が存在していることを報告するものである。

版木は全部で4枚、縦15センチ、横46センチ、厚さ2.5センチの桜材である³。表と裏に文字が彫られており、芭蕉の『幻住庵記』の全文と、先にも触れた「版木本文」の刊行に至る経緯を記した後書きが刻まれている。年紀は後書きに「万延元年初冬 東都 春秋庵梅笠」とあり、蕉門俳諧の系統を引く一派として、東日

本で勢力を保っていた春秋庵の九代目庵主・梅笠が万延元年（1860）に制作したものである。⁴



『幻住庵記』版木（部分）
第一面（上）と第八面（下）

2. 『幻住庵記』 本文

以下に本文を示す。なお、読みやすさを考え、適宜句読点を加えた。また、文中の「／」は改行されていること示す。

¹ 曲翠。初号が「曲水」である。万治三年（1660）～享保二年（1717）。近江膳所藩の重臣。貞享四年（1687）ごろ蕉門に入り、元禄二年（1689）冬、湖南滞在中の芭蕉が曲水邸を訪れて以来、親しく交わるようになった。元禄四年（1691）四月、伯父・幻住老人の隠棲宅・幻住庵を修復して芭蕉に提供し、『幻住庵記』執筆の機縁を作った。芭蕉に風雅最上位の人と称賛された。（参考『俳文学大辞典』角川書店）

² 白石悌三「幻住庵記の諸本」『新岩波古典文学大系 芭蕉七部集』岩波書店、1990・3。

³ 版木の所蔵者は武蔵村山市内在住の渡辺善一郎氏である。

⁴ 白雄（元文三年〈1738）～寛政三年〈1791）を祖とする門派で、「春秋庵」の名称は安永九年（1780）、白雄が江戸に興した庵号による。庵主は、白雄—長翠—葛三（鳴立庵と兼庵）—帰童（其堂）—葛三（再度の庵主）—碩布—可布（逸淵）—有墨—梅笠と続いた。可布は上野国高崎で開庵していたし、梅笠は青梅在であったともされるので、庵主の交替とともにその本拠地も移動している。

〔表紙〕 芭蕉翁真跡／幻住庵記

いしやまのおく、岩間の後に山有、国分山といふ。そのかみ国分寺の名をつたふなるへし。ふもとに細き流をわたりて、翠微に昇ること三曲二百歩にして八幡宮立せ給ふ。神躰はみたの尊像とかや。唯一の家にてはなはたいむる事を、両部光をやハラけ、利益のちりを同したまふもまたとふとし。



『幻住庵記』に「八幡宮」として登場する近津尾神社

日比は人の詣さりければ、いとゝかみさひ、もの静なる傍に住捨し草の戸あり。蓬、根笹軒をかこみ、屋ねもり、壁落て狐狸ふしとを得たり。幻住庵といふあるしの僧何かしは、勇士菅沼氏曲水子の伯父になん侍しを、いまは八とせ計むかしになりて、まさに幻住老人の名をのみ残せり。予又市中をさること十とせはかりにして、いそちやゝちかき身は、みのむしの簍をうしなひ、かたつふりいゑを離て、奥羽きさかたの暑き日もおもてをこかし、高すなこあゆみくるしき北海の荒磯にきひすを破りて、ことし湖水の波にたゝよふ。鳩のうき巢のなかれ、とゝまるへき芦の一もとの陰たのもしく、軒端茨あらため、垣ねゆひそへなむとして、卯月の初いとかりそめに入し山の、やかていてしとさへおもひそみぬ。さすかに春の名残も遠からすつゝし咲のこり、山藤松にかゝりて、ほとゝきすしは、過るほと、宿かし鳥の便りさへあるを、木つゝきの

つゝくともいとはしなんとそゝろに興しては、魂呉楚東南に走、身は湘瀟洞庭に立。山は未申にそはたち、人家能ほとにへたゝり、南薫峯よりおろし、北風海をひたして涼し。日枝の山ひらの高根より辛崎の松は霞こめて、城あり橋有釣たるゝふねあり。笠とりにかよふ木樵の声、麓の小田に早苗とるうた、ほたる飛かふ夕闇の空に、水鶏のたゝく音美景物としてたらすといふ事なし。中にも三上山は土峯のおもかけにかよひて、武蔵野ゝふるきすみかもおもひいてられ、田上山に古人をかそふ。さゝほか嶽、千丈か峯、袴こしといふ山あり。黒津の里はいとくろう茂りて網代守にそとよみけむ萬葉集のすかたなりけり。猶眺望くまなからんと後の峯にはひのほり、松の棚作、わらの円座を敷て猿の腰掛と名付。彼海棠に巢をいとなみ、主薄峯に庵をむすへる王翁除佞か徒にはあらず。唯睡辟山民となつて孱顔に足を投出し、空山に虱を捫て座ス。



幻住庵（滋賀県大津市）

たま、心まめなる時は、谷の清水を汲てみつから炊、とく、の雫を掬て一炉の備へいとかろし。はたむかし住けむ人のことに心高く住なし侍りて、たくみ置る物すきもなし。持佛一間を隔て夜るの物納へき處

などいさゝかしつらへり。さるを、つくし高良山の僧正は加茂の甲斐何かしか巖子にて、このたひ洛にのほりみまそかりけるを、ある人をして額をこふ。いとやす／＼と筆を染て幻住庵の三字を送らる。やかて草案の記念となしぬ。すへて山居といひ旅寝といひ、さる器たくはふへくもなし。木曾の檜笠、越の菅簀計枕の上の柱に掛たり。昼は稀／＼とふらふひと／＼に心を動し、あるは官守の翁、里のおのことも入来りていのしゝの稲くひあらし、兎のまめはたにかよふなど、我聞しらぬ農談。日既山の端にかゝれば、夜座静に月を待てハ影をともなひ、燈をとりてはもうりやうに是非をこらす。かくいへはとてひたふるに閑寂をこのみ、山野に跡をかくさむとにはあらず。やゝ病身人に倦て世をいとひし人に似たり。つら／＼年月の移こしつたなき身のとかをおもふに、一たひは仕官懸命の地をうらやみ、ある時は仏難祖室のとほそにいらむとせしも、たとりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して暫生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此一筋につなかる。樂天は五臓の神を破り、老杜は瘦たり。賢愚文質のひとしからさるも、いつれか幻のすみかならずやとおもひ捨てふしぬ。

先たのむ／＼椎の木も有／＼夏こたち

元禄三仲秋日／＼芭蕉自書 桃

幻住庵の記遺稿は、淡海貞固堂の什物なりしをあるしそのまゝに模写して梓にのほせ、百五十部を調し、粟津本廟祖翁の遠忌に施す。おのれもその会式につらなりて、此一帖を恵まれたれば、としころ門葉の人々にうつさしむ。しかあるに、七部猿みのゝ巻にあらはしたるは、いさゝかたかふところありて、同異のうたかたすくならず。よりにて、この真蹟をふたゝひさくら木にちりはめ、帰りはなのかをりいよく高く、末の世に残さんことをはかる社盟千鳥庵麗舎か荷擔にまかせて、ことし草堂のしくれ忌に

披露なし。諸風子へ贈り侍ることゝはなりぬ。

于時萬延元年初冬／東都春秋庵梅笠 和舎

芭蕉翁真蹟／幻住庵記／発起 春秋庵



とくとくの清水

3. 『幻住庵記』の内容

本文は、近江・国分山にある幻住庵とその周辺の描写から始まる。石山寺の奥に岩間寺があり、そのさらに奥が幻住庵を擁する国分山である。その国分山の「翠微（八合目）」に鎮座する八幡宮のかたわらに幻住庵は位置している。

さて、これまで奥羽など行脚してきた芭蕉は、晩春四月に庵に入った。ツツジが咲残り、藤が咲染め、ホトトギス、カケス、キツツキと言った鳥が訪れる、そのような幻住庵から遠く望む近江・琵琶湖の周囲は日枝の山（比叡山）、比良の山、辛崎の松（唐崎）、三上山、田上山といった歌枕が並ぶ。芭蕉は琵琶湖を取り囲む風光明媚な景色の様々を、唐の詩人杜甫の詩句を引用しつつ記している。

そして、幻住庵では、自ら清水を汲み、飯を炊き、宮を守る人々がたまさか訪れては話している「農談」に耳を傾ける日々であった。夜は人生について思い計り、こうして閑居に住まうと、まるで世捨て人になったようで、昔、仕官を志したことや、禪門を叩いたことを思い起こす。自らの心に問い、無能無才ではあるが、俳諧人図時に定まってきたこの「生」も、考えてみれば幻のようであると結ぶ。

貞享元年（1684）8月に『野ざらし紀行』の旅に出、貞享4年（1687）8月には『鹿島詣』、10月には『笈の小文』の旅に出て、郷里・伊賀で越年した芭蕉は江戸への帰路を『更級紀行』にまとめている。そして、元禄二年（1689）3月に『奥の細道』の旅に向かった。「日々旅にして旅を栖とす」という芭蕉の「生」に対する姿勢はこうした旅を通じて体得されたが、「幻住庵」滞在は、長年にわたる旅の疲れを癒すためでもあった。

芭蕉はこの後、「蕉風」を確立し、江戸俳諧に「新風」を興すことになるが、この「風」を上方にも及ぼすために最後の旅に出て、その旅先で弟子に看取られながら亡くなるのである。

4. 「版木本文」の特徴とその価値

「版木本文」が他の諸本と大きく異なる点は、「版木本文」には当該本文の版行された経緯を示す「後書き」が掲載されていることにある。

「版木本文」が制作された経緯を「後書き」から追ってみよう。近江・貞固堂⁵の持ち物であった『幻住庵記』を、貞固堂の主が模写して、限定一五〇部で版行した。これは、栗津にある芭蕉の霊廟にて「遠忌」が行われるに際し、列席者に贈るためのものであった。そして、「遠忌」に出席した梅笠自身が当該の一帖を貰い受けた。ところで、当該の一帖を長年係累の人々が請うままに筆写させていたところ、『猿蓑』に収められている『幻住庵記』とは本文にいささか異なる点があることなどから、千鳥庵⁶の協力を得て、

あらためて真跡を版行することにしたというのである。

「後書き」にも言及されている「版木本文」と『猿蓑』（以下「猿蓑本文」とする）との異同は言葉の一部異なる部分や平仮名表記、漢字表記の別、また、一部言葉の入れ替っている部分などである。早稲田大学本の『幻住庵記』には表紙に「栗津義仲寺蔵」の印もあることから、あるいは、当該の一本が「遠忌」に贈られたものであった可能性もある。そして、「版木本文」はこれに版行の経緯を記した一文を加えて真跡の模刻を復刻した一本である可能性が高い。

「後書き」からは、関東圏における蕉門の人々が近江の聖蹟・幻住庵と密接な関わりをもっていったということが推し量られる。さらに、万延元年に至る当時、芭蕉に対する敬慕の念も含め、『幻住庵記』そのものが大いに享受されていたことも確認される。そして、「版木本文」にいうところの「遠忌」について、「遠」の字の示す具体的な年数を図ることは難しいが、例えば万延元年（1860）から遡ること十六年あまりの天保十五年（1844）の芭蕉翁一五〇回忌などが最も近い「遠忌」に当たるのではないかと考える。

最後に、「版木本文」は発見されて以来未だ研究の対象として扱われることがなかった。「後書き」に記された庵や庵主の詳細等未だ明らかでない事柄も多い。しかし、蕉門に名を連ねた人々の交流や地域における活動の実態等を明らかにする一助となることを期して、ここにその本文を紹介する次第である。

付記 稿を成すにあたり、和洋女子大学の佐藤勝明先生、國學院大學栃木短期大学の塚越義幸先生には懇切なご助言を頂戴し、清泉女学院大学の玉城司先生にはご架蔵の版本をご恵贈戴きました。ここに記して感謝申し上げます。そして、版木の翻刻等について仲介の労を取ってくださった武蔵村山市立歴史民俗資料館の方々、所蔵者である渡辺善一郎様には記して深謝申し上げます。

⁵ 未詳。

⁶ 未詳。

平成25年度の主な事業報告

1 特別展「横中馬獅子舞」

当地伝承260年ともいわれる「横中馬獅子舞」を取り上げ、巡行や舞の様子を紹介するとともに、使用する道具・衣装類を展示しました。詳細は平成25年度特別展解説書「横中馬獅子舞」(定価500円)をご参照ください。

*展示期間：平成25年10月5日～12月8日



展示風景 (ウォールケース内)

2 企画展「狭山丘陵南側の植物」

自然散策で狭山丘陵を訪れる方を対象に、吉田政一氏撮影の植物写真をもとに、狭山丘陵南側の花を中心とした植物を紹介し、散策の一助としました。

*展示期間：平成25年5月18日～6月16日

3 夏休み子ども展示「地図でみる武蔵村山の昔と今」

昭和以降、大きく変わった土地利用による開発と人々の生活空間の変化を館所蔵の地図を使って紹介しました。

*展示期間：平成25年7月20日～9月1日

4 ミニ企画展「武蔵村山の戦争資料」

昭和20年3月10日「東京大空襲」武蔵村山市では4月に2回の空襲被害にあいました。それらの残された記録や戦争資料を展示しました。

*展示期間：平成26年3月10日～3月31日

5 歴史講座「三匹獅子と横中馬獅子舞」

(1) 期日：平成25年11月16日(土)

(2) 会場：武蔵村山市立歴史民俗資料館

(3) 講師：城崎陽子氏(市文化財保護審議会委員)

6 文化財見学会「横中馬獅子舞をめぐる」

(1) 期日：平成25年10月19日(土)

(2) 会場：歴史民俗資料館周辺

(3) 講師：当館学芸員 ※雨天中止

7 夏休み子ども体験教室「ぶらっと探検! 武蔵村山 今むかし」

(1) 期日：平成25年8月3日(土)

(2) 会場：歴史民俗資料館周辺

(3) 講師：当館学芸員

8 星空観察会

(1) 期日：平成25年8月17日(土)

(2) 会場：武蔵村山市立歴史民俗資料館・のぞみ福祉園駐車場

(3) 講師：高橋芳弘氏(昭島天体観測所)

9 自然観察会「狭山丘陵の早春」

(1) 期日：平成26年3月8日(土)

(2) 会場：都立野山北・六道山公園

(3) 講師：鈴木君子氏(日本野鳥の会)

10 狭山丘陵市民大学「近世の村を語る」(全3回)

狭山丘陵についてより理解を深めるため、年度ごとにテーマを決め、東村山市・東大和市との三市合同で行っている連続講座です。

今年度は、「近世の村を語る」と題し、各市に残る文書史料から、狭山丘陵の近世後期の村の様子について学びました。

第1回 バス見学会(特別展の見学)

(1) 期日：平成25年12月8日(土)

(2) 会場：入間市博物館

(3) 講師：入間市博物館学芸員

第2回「里正日誌」からみた村の幕末維新

(1) 期日：平成26年1月18日(土)

(2) 会場：東村山ふるさと歴史館

(3) 講師：森安彦氏(国文学研究資料館名誉教授)

第3回 三市所在の古文書見学会

(1) 期日：平成26年2月8日(土)

(2) 場所：武蔵村山市中部地区会館

(3) 講師：各市学芸員 ※降雪中止

11 資料館入館状況（平成25年度）

月	区分	開館日数 (日)	利用者数 (人)	市 内		市 外	
				人数 (人)	割合 (%)	人数 (人)	割合 (%)
4		28	1,469	485	33	984	67
5		28	1,936	674	34.8	1,262	65.2
6		21	1,173	694	59.2	479	40.8
7		29	1,542	720	46.7	822	53.3
8		29	1,607	622	38.7	985	61.3
9		28	1,170	508	43.4	662	56.6
10		29	3,179	1,027	32.3	2,152	67.7
11		28	1,429	550	38.5	879	61.5
12		25	993	423	42.6	570	57.4
1		26	1,224	685	56	539	44
2		26	846	510	60.3	336	39.7
3		29	1,635	810	49.5	825	50.5
合計		326	18,203	7,708	42.3	10,495	57.7

歴史民俗資料館改修工事の実施について（平成26年度）

平成26年9月から12月にかけて、資料館の改修工事が実施されました（工事期間を含む平成26年9月から27年1月末までは休館）。

この改修工事は、特定防衛施設周辺整備調整交付金を充当して行ったもので、来館者の利便性の向上を図ることを目的に、昭和56年の開館当初より、大規模な改修が施されることなく、老朽化していた施設の改修を行ったものです。

主な改修箇所としては、冷暖房機の入替え、屋根・外壁の塗装改修、館内（収蔵庫・整理室を除く）の床・壁の改修、事務室内のOAフロア化、展示室照明のLED化などが挙げられます。

この工事は、常設展示のリニューアルを目的

とした改修工事ではありませんが、資料館の再開時期にあわせ、常設展を復旧させる際には、展示構成を一部見直し、これまで常設では展示されていなかった資料を展示に組み込んだり、来館者の方が、その道具の使用方法をイメージしやすいよう、イラストや模式図を用いたパネルを設置するなどの点に配慮しました。

◆新たに展示された主な資料◆

- ・ 眞福寺所蔵正應三年銘板碑拓本
- ・ 三ツ木天王様祇園ばやし関連資料
- ・ 横中馬獅子舞関連資料
- ・ 重松囃子（ばやし）関連資料
- ・ 高札（慶応四年、正徳元年）



改修工事後の歴史民俗資料館外観



常設展示室（原始～中世）

狭山丘陵南麓西側の自然 part 5 - “スマイレ” 再登場 -

3年前の「資料館だより第53号」で、狭山丘陵の「スマイレ」21種を紹介しました。前回の撮影が平成23年ですから、その時から3年が過ぎ、多くの新しいスマイレが見つかりました。改めて、狭山丘陵南西麓を中心として生息する「スマイレ」を紹介します。

現在確認されているスマイレは、吉田政一氏が事務局長を務めている「狭山丘陵自然会」の平成26年秋までの調査では、外来種や亜種・変異種も含めて30種ですが、先日、都立野山北・六道山公園ボランティアをされている生き物倶楽部の大倉さんによると、亜種だけで40種を数えるとのことでした。

東京都立野山北・六道山公園内及びその周辺で、植物の盗掘が数多く発生しています。毎年同じことを申し上げるのは心苦しいのですが、“希少だから売れる”“希少だから自分の手元に置こう”ではなく、“その植物にとって環境が合っているから自生する”のです。場所を移せば、いずれ枯死してしまいます。みんなで植物とその自然環境を保全し、可憐な花たちに会いに行きましょう。

(写真提供：吉田政一氏)

<スマイレサイシン類>



ナガバノスマイレサイシン



シロバナナガバノスマイレサイシン

<タチツボスマイレ類>



タチツボスマイレ



アカフタチツボスマイレ（葉脈に赤く斑が入る以外は、タチツボスマイレと同じ）



↑オトメスミレの
距（花裏の突起）



マルバタチツボスミレ(タチツボ
スミレ×ニオイタチツボスミレ
の交雑種)

オトメスミレ（タチツボスミレのシロバナ種、距
が白いものはシロバナタチツボスミレとなる）



サクラタチツボスミレ（タチツボスミレの
花卉が桃色の種）



ニオイタチツボスミレ（花卉が丸く濃紫色
で、側弁の白とのコントラストが明確）



ミドリタチツボスミレ（花卉が葉化し、花は
上を向くのが特徴。タチツボスミレの変異種）



サクラタチツボスミレの変異種（通常5枚あ
る花卉が4枚と少なく、変異種とした。春咲
きスミレには変異種は少なく、珍しい株）



<ニョイスミレ類>

←
ニョイスミレ
(ツボスミレ)

ムラサキ
コマノツメ→
(ムラサキコマ
ノツメは、ニョ
イスミレの色違
い種)



アカネスミレ



オカスミレ

(アカネスミレには全体に細毛があり、オカスミレには細毛がない)



スミレ (学名: マンジュリカ、スミレ全体を指す名と区別するため、学名で呼ぶ人が多い。側弁に細毛がある)



ワカシュウスミレ (側弁に細毛がないスミレ)



アリアケスマレ



エイザンスミレ (和名は比叡山で発見されたことによる、切れ込みのある葉が特徴)



コスミレ (側弁に細毛なし)



ヒゲコスミレ
(側弁に細毛のあるコスミレ)

<ミヤマスマレ類>



シロバナツクシコスミレ
(コスミレの白花種)



タカオスマレ (ヒカゲスマレの
葉が茶色に変色した変種)



ノジスマレ



ヒメスミレ (狭山丘陵で一番小さなスミレ)



マルバースミレ



フモトスミレ (スミレ好きの中で一番人気)



アオイスミレ (狭山丘陵で一番先に咲く)

<外来種スミレ類> アメリカスミレサイシン3種 (北アメリカ原産種、園芸種として日本に入り野生化しているが、繁殖力が強く、在来種を脅かす存在)



スノープリンセス



ブリケアナ



パピリオケアナ

発行：武蔵村山市立歴史民俗資料館 〒208-0004 東京都武蔵村山市本町5-21-1

TEL 042 (560) 6620/FAX 042 (569) 2762 Mailアドレス mmc-reki@blu.m-net.ne.jp

HPアドレス <http://www.city.musashimurayama.lg.jp/shiryokan/index.html>